

9/30 Wed.

非破壊検査 presents 第45回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No.45, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd / Festival Hall 19:00

10/2 Fri.

第662回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.662 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ヴァイオリン
Violin
第1コンサートマスター
First Concertmaster

R. シュトラウス
R. STRAUSS

[休憩]
[Intermission]

ブルックナー
BRUCKNER

ローター・ツァグロゼク *-p.5*

LOTHAR ZAGROSEK

ルノー・カプソン *-p.8*

RENAUD CAPUÇON

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品8 [約30分] *-p.11*

Violin Concerto in D minor, op. 8

I. Allegro

II. Lento ma non troppo

III. Rondo: Presto

交響曲 第4番 変ホ長調 〈ロマンティック〉 WAB104
(1888年稿/コーストヴェット校訂版) [約65分] *-p.12*

Symphony No. 4 in E flat major, "Romantic" WAB104

(Version 1888, Edited by B. Korstvedt)

I. Ruhig bewegt (nur nicht schnell)

II. Andante

III. Scherzo: Bewegt – Trio : Gemächlich

IV. Finale: Mäßig bewegt

10/17 Sat.

第291回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.291 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

10/18 Sun.

第291回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.291 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Guest Concertmaster

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

ショパン
CHOPIN

[休憩]
[Intermission]

シューマン
SCHUMANN

レスリー・スガナンダラージャ *-p.6*

LESLIE SUGANANDARAJAH

アレクサンダー・ガジェヴ *-p.8*

ALEXANDER GADJIEV

白井 圭 (ゲスト)
KEI SHIRAI

歌劇〈ルサルカ〉から“ポロネーズ” [約5分] *-p.14*

‘Polonaise’ from “Rusalka”

ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11 [約43分] *-p.15*

Piano Concerto No. 1 in E minor, op. 11

I. Allegro maestoso

II. Romanze: Larghetto

III. Rondo: Vivace

交響曲 第3番 変ホ長調 作品97 〈ライン〉
[約32分] *-p.16*

Symphony No. 3 in E flat major, op. 97 “Rheinische”

I. Lebhaft

II. Scherzo: Sehr mäßig

III. Nicht schnell

IV. Feierlich

V. Lebhaft

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

特別協賛：非破壊検査株式会社 (9/30)

協力：コジマ・コンサートマネジメント (9/30)、アフラック生命保険株式会社 (10/2)

※10/2公演では日本テレビの収録が行われます。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

共催：東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))

独立行政法人日本芸術文化振興会

10/23 Fri.

第696回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.696 / Suntory Hall 19:00

10/25 Sun.

第153回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.153 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Conductor

チェロ
Cello

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

モーツァルト
MOZART

シューマン
SCHUMANN

[休憩]
[Intermission]

モーツァルト
MOZART

ジョヴァンニ・アントニーニ -p.7
GIOVANNI ANTONINI

ソル・ガベッタ -p.9
SOL GABETTA

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

交響曲 第25番 ト短調 K.183 [約24分] -p.18
Symphony No. 25 in G minor, K. 183
I. Allegro con brio
II. Andante
III. Menuetto
IV. Allegro

チェロ協奏曲 イ短調 作品129 [約25分] -p.19
Cello Concerto in A minor, op. 129
I. Nicht zu schnell – II. Langsam – III. Sehr lebhaft

交響曲 第40番 ト短調 K.550 [約30分] -p.20
Symphony No. 40 in G minor, K. 550
I. Molto allegro
II. Andante
III. Menuetto: Allegretto
IV. Allegro assai

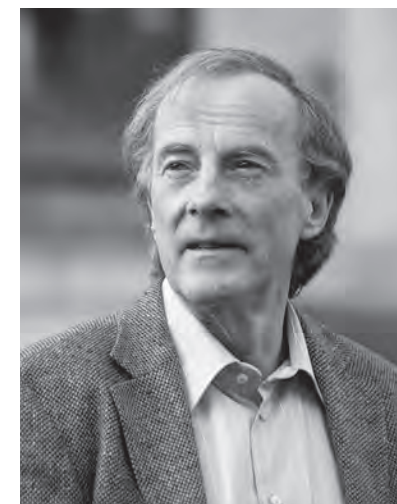
主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
文部科学省 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：横浜みなとみらいホール（10/25）

指揮

ローター・ツァグロゼク

LOTHAR ZAGROSEK, Conductor

ツァグロゼクが生む
極上のハーモニー！
〈ロマンティック〉



©Christian Nieling

円熟の極致に立つドイツの巨匠が再び読響の指揮台に登場。古典派から現代作品まで幅広いレパートリーを誇り、ドイツ・オーストリア音楽で定評のあるツァグロゼクが、ブルックナーの交響曲第4番〈ロマンティック〉を指揮する。

1942年ドイツのバイエルン州に生まれ、H. スワロフスキー、B. マデルナ、カラヤンらに師事。パリ・オペラ座、ライプツィヒ歌劇場の音楽総監督、ベルリン・コンツェルトハウス管の首席指揮者などを歴任した。97年にシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督に就任し、ノーノやラッヘンマンらの現代オペラやワーグナー〈ニーベルングの指環〉4部作などを指揮して絶賛された。2006年までの在任期間中に、同歌劇場は権威ある専門誌『オーパンヴェルト』の年間最優秀歌劇場に5度選ばれ、自身も年間最優秀オペラ指揮者に2度選出された。その後13年にも選ばれ、合計3度の選出はキリル・ペトレンコに次いで歴代2位である。

これまでにベルリン・フィル、フランス国立管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン・フィルなどと共演している。また、ウィーン国立歌劇場、ハンブルク歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、ザルツブルク音楽祭などでも活躍。多くの録音でも高い評価を得ている。

音楽教育や若手の育成にも情熱を注いでおり、ドイツ音楽評議会主催の権威ある指揮コンクール初代審査委員長を務めた。17年にはドイツ連邦共和国の一等功労十字章を授与。読響とは16、19、25年に続き、4度目の共演。

9/30
大阪定期

10/2
定期

Maestro

10/17
土曜マチネー

10/18
日曜マチネー

Maestro

指揮

レスリー・スガナダラージャ

LESLIE SUGANANDARAJAH, Conductor

注目の気鋭が紡ぐ
魅惑の交響曲
〈ライン〉



©Mathias Baus

感性豊かな音楽作りと自然体な指揮で、欧州を中心にコンサートとオペラの両分野で活躍する気鋭が読響の舞台に登場する。シューマンの傑作交響曲〈ライン〉を指揮し、カラフルかつ斬新な響きで幻想的なひと時へと導く。

1983年、スリランカ生まれ。幼少時に家族とともに移住したドイツでピアノ、フルート、オルガンを始める。ハノーファーとリュベックの音楽大学で学んだ後に、フランクフルト音楽大学で指揮課程を修了。2014/15年シーズンからドレスデン・フィルのアシスタント指揮者としてキャリアをスタートさせた。2019年からザルツブルク州立劇場の音楽監督を務めており、就任記念として披露した新演出の〈ローエングリン〉で成功を収め、大きな話題を呼んだ。その後も〈さまよえるオランダ人〉〈エフゲニー・オネーギン〉〈アイダ〉などを指揮し、数々の名舞台を築いている。24年7月にはドイツのシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州で行われたオイティン音楽祭に出演し、〈魔弾の射手〉を指揮。柔軟かつフレッシュな音楽性を十全に発揮して喝采を浴びた。これまでにロイヤル・フィル、ベルリン・コンツェルトハウス管、BBC響、リンツ・ブルックナー管などに客演し、魅力あふれるサウンドと確かな手腕を披露している。2026年秋からはオルデンブルク州立劇場コンサート部門の首席指揮者を務め、2027/28年シーズンからはフライブルク劇場の音楽監督に就任を予定するなど、今世界で最も注目されている指揮者の一人である。読響初登場。

指揮

ジョヴァンニ・アントニーニ

GIOVANNI ANTONINI, Conductor

まるでマジック。
バロック音楽の鬼才が
神秘的な世界へ誘う！



©読響

斬新な音楽解釈で旋風を巻き起こし続ける鬼才が読響に8年ぶりの客演を果たす。披露するのは、モーツァルトの交響曲第25番と第40番。どちらもト短調の神秘的な色を帯びる作品だ。アントニーニは独自の世界観を繰り広げ、モーツァルト作品の新たな側面を浮き彫りにする。

1965年、イタリアのミラノ生まれ。ミラノ市立音楽院およびジュネーヴ古楽音楽院に学ぶ。89年にバロック・アンサンブル“イル・ジャルディーノ・アルモニコ”を創設。同団体では指揮者としてのみならず、リコーダーやフラウト・トラヴェルソのソリストとしても幅広い活躍を続けている。現在バーゼル室内管の首席客演指揮者を務めており、大胆な音楽作りで高い評価を得ている。バロックと古典派の作品における革新的な音楽解釈は世界的にも名高く、これまでにベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、チューリヒ・トーンハレ管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ロンドン響、シカゴ響、チェコ・フィルなど多くの一流楽団に客演。ミラノ・スカラ座、チューリヒ歌劇場など世界中の劇場にも指揮者として登場し〈イドメネオ〉などを指揮した。多くの音楽祭にも出演しており、ザルツブルク音楽祭では〈ジュリオ・チェザレ〉〈ノルマ〉を指揮して絶賛された。バーゼルのハイドン財団が主催するハイドンの生誕300周年に向けたプロジェクト「ハイドン2032」の芸術監督として交響曲全曲録音とコンサートを重ねている。読響とは2018年以来、2度目の共演。

10/23
名曲

10/25
横浜マチネー

Maestro

9/30
大阪定期

10/2
定期

Artist



©Universal Music

ヴァイオリン

ルノー・カプソン

RENAUD CAPUÇON, Violin

艶やかな音色と完璧なテクニックで世界を魅了する名手。フランスのシャンベリ生まれ。パリ国立高等音楽院に学ぶ。ソリストとして第一線で活躍しており、ハイティンク、バレンボイム、ドホナーニ、ハーディング、ロトラ名匠の指揮で、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ボストン響、ロンドン響、シカゴ響、パリ管などと共演を続けている。ザルツブルク音楽祭やルツェルン音楽祭など世界最高峰の音楽祭でも活躍。これまでに数多くのCDをリリースし受賞多数、22年にはドイツ・グラモフォンとの契約を発表した。13年からエクサン・プロヴァンスのイースター音楽祭、16年からグシュタード冬音楽祭、23年からエヴィアン音楽祭の音楽監督を務めている。読響とは今回が4度目の共演。

10/17
土曜マチネー

10/18
日曜マチネー

Artist

完全無欠なテクニックと、強弱・音色を鋭敏にとらえた表現で聴き手を魅了する名手。9歳でオーケストラと初共演し、10歳で初のリサイタルを開催。モーツァルテウムおよびハンス・アイスラー音楽大学で学び、2015年には浜松国際ピアノコンクールで優勝、21年にはショパン国際ピアノ・コンクールで第2位に入賞し話題を呼んだ。これまでにSWR響、ベルリン・コンツェルトハウス管、ブラハ響などと共演。19年～21年にはBBCニュー・ジェネレーション・アーティストを務め、22年にはテレンス・ジャッド賞を受賞した。23年にはイタリアのアッビアーティ賞とスロヴェニアのプレシェレン賞を受賞し、24年からはイタリアとスロヴェニアの国境を越えたフェスティバル「Prečkanja-Sconfinamenti」の芸術監督を務めている。読響初登場。



©Vitoria Nazarova

ピアノ

アレクサンダー・ガジェヴ

ALEXANDER GADJIEV, Piano



©Julia Wesely

チェロ

ソル・ガベッタ

SOL GABETTA, Cello

鮮やかなテクニックと澄んだ歌心を併せ持つチェリスト。アルゼンチン生まれ。豊かな才能で若くから頭角を現し、2004年にクレディ・スイス・ヤング・アーティスト賞を受賞。その後07、09、13年にエコー・クラシック賞を3度受賞、12年にドイツ・ジュネス・ミュージカーレのヴェルト賞を受賞、10年にはグラモフォン賞ヤング・アーティスト・オブ・ザ・イヤーに選ばれるなど数多くの受賞歴を誇る。これまでにベルリン・フィル、ベルリン国立歌劇場管、BBC響などと共演を重ねるほか、ルツェルン音楽祭など世界各地の音楽祭にも招かれている。彼女のために作曲された協奏曲「Presence」を収録したアルバムは、華麗な技巧と独自の世界観が高い評価を得た。05年からはバーゼル音楽院で後進の指導に当たっている。読響初登場。

10/23
名曲

10/25
横浜マチネー

Artist

R. シュトラウス

ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品8

9/30
大阪定期

10/2
定期

Program Notes

リヒャルト・シュトラウス(1864～1949)の真骨頂は、何といってもオペラだろう。〈サロメ〉(1905年)、〈ばらの騎士〉(1910年)ほかで、自国ドイツの楽劇作家、リヒャルト・ワーグナー(1813～83)の衣鉢^{いはつ}を継ぎ、発展させた。それから〈英雄の生涯〉(1898年)といった数々の交響詩。「序曲」でも「交響曲」でもない、これも詩的・文学的な発想を含んだ管弦楽曲である。

では、協奏曲は？

有名なところでは、ホルン協奏曲第2番(1942年)、オーボエ協奏曲(1945年)といった作品がある。いずれもモーツァルトの世界とも呼びたい簡素さ・明朗さに満ちた作品であるが、それは20世紀前半を通してさまざまな筆致と形式を試したのちに選んだ「晩年様式」だったと言ってよい。

一方で、まだ10代だった時分、^{なら}倣うべき古典的な形式として交響曲や協奏曲に挑んだ時期があった。ミュンヘン宮廷歌劇場のホルン奏者にしてアンチ・ワーグナーで鳴らした父親の影響もあったか。ヴァイオリン協奏曲二短調もその一つで、17歳のとき、ギムナジウムでの授業中に(?) 数学のノートに書きつけ始めたものだという。ヴァイオリンの師であり、父の楽団の同僚でもあったベンノ・ヴァルターに捧げるべく書かれた3楽章制の作で、何も知らずに聴いたら、ドイツ・ロマン派のウェーバー、メンデルスゾーン、ブルッフあたりを想起するかもしれない。

第1楽章 アレグロ。展開部の充実したソナタ形式。独奏者だけで技巧を披露する「カデンツァ」はない。

第2楽章 レント・マ・ノン・トロppo。哀愁ただようと短調の「歌」。

第3楽章 ロンド：プレスト。8分の6拍子のタランテラ(イタリア風舞曲)と思わせておいて、4分の2拍子の旋律に切り替わる。その対照の妙。

〈船木篤也 音楽評論〉

作曲：1882年／初演：1882年12月5日、ウィーン(ピアノ伴奏版)、1896年2月17日、ライブツィヒ(管弦楽版)／演奏時間：約30分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ブルックナー

交響曲 第4番 変ホ長調〈ロマンティック〉WAB104
(1888年稿／コーストヴェット校訂版)

オーストリアの敬虔なカトリック信者らしく、アントン・ブルックナー（1824～96）は教会音楽にも取り組んだが、彼の代表作といえば交響曲である。番号付きが9曲。習作が1曲。さらに、第1番の次にかかれ、のちに「無効」とされた第0番と呼ばれる作品があるので、全部で11曲がある。そのうち第4番は大変に人気があり、演奏頻度も抜きん出て高い。その理由の一つに、「ロマンティック」という副題があるだろう。これは作曲者自身の命名による正統なものだ。

もっとも、「ロマンティック」という語がここで示唆していることと、現代の我々がこの語に抱くイメージとでは、かなりの違いがある。

ヨーロッパの芸術分野で盛んに言われるようになった「ロマンティック」なる語は、もともと文学や哲学の分野に端を発している。時は世俗化と産業化が加速し始めた19世紀はじめ。F. シュレーゲルやノヴァーリスといった詩人たちは、俗な現実を超える「無限なるもの」を詩的に「予感」し、その態度を「ロマンティック」と呼んだ。この時代の文学に、中世などの失われた過去や、お伽の世界がよく描かれるのは、その表れだ。

なるほど、読書家とはいえないブルックナーが、こうした芸術論を直接念頭においていたとは考えにくい。それでも、ウェーバーの〈魔弾の射手〉や、ワーグナーの〈ローエングリン〉といったオペラを通して、19世紀前半に好まれた「ロマンティックなもの」を共有していたはずだ。ブルックナーは、この交響曲の開始部を説明するために、ある聖職者に宛てて、こんな描写をしたためている。「中世の町。夜明けのとき。見張りの塔から起床の合図が鳴り響く。門が開く。駿馬にまたがった騎士が、さっそうと戸外へと飛び出してゆく……」

本作でブルックナーは交響曲における初の成功をおさめたが、それは今日でも最もよく演奏される第2稿の初演（1881年）がもたらしたものだ。今日は、さらに手が加えられ1888年に初演をみた第3稿を聴く。これはフェルディナント・レーヴェほか作曲者の弟子による「編曲版」として、20世紀後半には真正性が疑われたものだが、21世紀に入ってベンジャミン・コーストヴェットの校訂（2004年出版）により、ブルックナーの承認と協働のもとに成ったものとみなされた。

第2稿との違いは、まず楽器法。既存のパートが書き換えられているばかりでなく、それまでになかったピッコロとシンバルまでもが加わる。さらに楽章内部の構成。例として、第4楽章における再現部の短縮（第2稿の練習記号PからQまでをカット）を挙げておこう。

第1楽章 落ちついて動的に（あくまで速くしない）。弦楽のかすかなトレモロで開始。これを背景に、やがてホルンがシンプルな信号音を吹く。そうして次第に全体がふくらみ始め、ついには第1主題の総奏へと至る（「タンタン・タタタ」というリズムが特徴的）。主題はほかに、歌に満ちた第2主題、第1主題を変形した3つ目の勇ましい主題がある。金管楽器によるコラール（讃美歌）風の場面で、第3稿は、ティンパニを轟かせる。

第2楽章 アンダンテ。森をひとり逍遙するかのような、あわいメランコリーをたたえた音楽。ヴァイオリンを中心とした弦楽合奏が、敬虔な感情を表す。

第3楽章 スケルツォ／動的に。ホルンの躍動も目覚ましい狩りの音楽。狩りとくれば、やはり森。森とくればドイツ・ロマン派である。「のんびりと」とある中間部は、木管楽器を中心とした牧歌的な踊りの音楽。

第4楽章 フィナーレ／適度に動的に。冒頭は、祈祷さながらのつぶやきが高じていき、ついに頂点で第1主題が天啓を告げるかのよう。葬送行進風の第2主題。威厳に満ちた第3主題。光明を求めて高みへと昇ってゆく終結部。神々しいもの、遥かなものへの憧れは、まさに「ロマンティック」な態度と言えよう。最後に、交響曲冒頭の信号音がこだまする。

〈舩木篤也 音楽評論〉

作曲：1874年（第1稿）、1876～80年（第2稿）、1887～88年（第3稿）／第3稿による初演：1888年1月22日、ウィーン／演奏時間：約65分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル）、弦五部

10/17
土曜マチネー

10/18
日曜マチネー

Program Notes

ドヴォルザーク 歌劇〈ルサルカ〉から“ポロネーズ”

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）といえば交響曲など器楽曲の印象が強いが、生涯に10作を超える作品を残したオペラ作曲家でもあった。この分野の代表作である歌劇〈ルサルカ〉は、現在も国際的なレパートリーとして定着している。作曲は晩年期の1900年。当時、ドヴォルザークは歌劇〈ルサルカ〉以外にも、歌劇〈悪魔とカーチャ〉や交響詩〈真昼の魔女〉〈野ばと〉など、おとぎ話や伝説を題材とする作品に精力を傾けていた。

ルサルカとはスラヴの民間伝承に登場する水の精の名。人間の王子に恋をしたルサルカは、魔女イェジババにお願いして人間の姿に変身する。だがその代償として、ルサルカは口がきけなくなってしまう。王子は美しいルサルカに心を奪われ結婚するが、言葉をしゃべれないルサルカから心が離れ、外国の公女へと心変わりする。悲しむルサルカは湖に戻る。しかし、元の仲間たちのもとへ帰るには王子を殺さなければならない……。

もともとの民間伝承でのルサルカは、水死した女性などが幽霊になって若い男を誘惑して死に至らせる怖い存在だが、台本作家のヤロスラフ・クヴァピルはこの伝承をアンデルセン童話の『人魚姫』そっくりの悲恋のヒロインの物語に生まれ変わらせた。

発声できなくなるヒロインを主役に据えるというアイディアは、オペラとしては型破りもいいところだろう。このポロネーズが演奏されるのは第2幕の婚礼の祝宴の場面。音楽の華やかさに反して、物語としては心が痛む場面である。ルサルカは声を失っている。祝宴に招かれた外国の公女が王子を誘惑すると、王子はその美貌にすっかり魅了されてしまう。思いを伝えられないルサルカは、ひとり打ちひしがれる。盛大な祝いの音楽が、ルサルカの孤独を際立たせる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1900年／初演：1901年3月31日、プラハ国民劇場／演奏時間：約5分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、ハープ、弦五部

ショパン ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11

1830年10月11日、フレデリック・ショパン（1810～49）はワルシャワ国民劇場でピアノ協奏曲第1番を初演した。祖国を旅立つ前に開かれた「告別演奏会」と呼ばれる公演である。翌日、ショパンが親友ティトゥスに宛てた手紙には、公演を成功裏に終えたことへの安堵感が^{にじ}滲み出ている。

「昨日の演奏会は成功だった。僕はこれっぽっちも緊張しなかった。ひとりで弾いているときと同じように弾けた」「一度も客席からシーツという不満の声を浴びなかった」「オーケストラとあれほど落ちていて演奏できたことはない」

ピアノ協奏曲第1番は公演の前半に演奏された。第1楽章と第2楽章の間に他人の作曲によるアリアが演奏されたが、これは当時では珍しくないこと。後半には前年にパリで初演されたばかりの最新作、ロッシーニの歌劇〈ウィリアム・テル〉序曲が演奏されている。20歳の若者の門出を盛大に祝うような、華やかな選曲である。さらにショパンの初恋の人、コンスタンツィア・グワトコフスカがロッシーニの〈湖上の美人〉のカヴァティーナを歌い、最後はショパンが自作の〈ポーランド民謡による幻想曲〉を弾いて、満場の喝采を浴びた。その3週間後、ショパンはワルシャワを旅立ち、二度と祖国に帰ることはなかった。

第1楽章 アレグロ・マエストーソ オーケストラによる決然とした主題で開始され、ひとしきり白熱した後、独奏ピアノがきらびやかに登場し、華麗な技巧と豊かな歌心にあふれた楽想を展開する。

第2楽章 ロマンツェ、ラルゲット 作曲者の手紙によれば「穏やかでメランコリックなロマンス」であり「美しい春の月夜の夢想」。

第3楽章 ロンド、ヴィヴァーチェ 民俗舞曲クラコヴィアク風の活発なロンド。
^{けんらん} 絢爛たる独奏ピアノにオーケストラが応答し、華麗なフィナーレを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1830年／初演：1830年10月11日、ワルシャワ国民劇場／演奏時間：約43分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

10/17
土曜マチネー

10/18
日曜マチネー

Program Notes

10/17
土曜マチネー

10/18
日曜マチネー

Program Notes

シューマン

交響曲 第3番 変ホ長調 作品97 〈ライン〉

1850年、ロベルト・シューマン（1810～56）はドレスデンからデュッセルドルフに転居して、音楽活動の転機を迎えた。ドレスデン時代にピアノ協奏曲イ短調や交響曲第2番ハ長調をはじめとする傑作を残したが、この地の音楽界では望みどおりの信望と友情を得られず、新たなポストを新天地に求めた。当初、ライプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者などのポストを打診したものの実現には至らず、紆余曲折を経て、フェルディナント・ヒラーの後任としてデュッセルドルフ市音楽監督の職務を引き受けることになった。

ライン河畔のデュッセルドルフに到着したシューマン夫妻を、市民は温かく迎えた。音楽監督の職務にはシーズンに10回、オーケストラの定期演奏会を指揮することが含まれており、シューマンは自分のオーケストラを持つことになる。

赴任して間もなく、シューマンは交響曲第3番の作曲に着手した。デュッセルドルフのオーケストラのコンサートマスターを務めていたヴァジエルフスキによれば、シューマンがライン川上流にあるケルンの大聖堂を訪れた際に靈感を受けたことが、この交響曲の作曲の契機となったという。作品はシューマン自身の指揮によって初演された。なお、〈ライン〉の呼称は作曲者没後に付けられたものである。

第1楽章 生き生きと 各楽章の速度標語はドイツ語で記されている。雄大な冒頭主題によって勢いよく開始される。4分の3拍子で書かれているが、この冒頭主題がヘミオラ風になっている（3拍単位のところを2拍単位で分割する）ことがリズムに変化を与え、大河の奔流を連想させる。

第2楽章 スケルツォ、きわめて中庸に 晴朗で素朴な舞曲風楽章。

第3楽章 速くなく 弦楽器と木管楽器がささやくように対話する。

第4楽章 荘厳に ケルン大聖堂で目にした枢機卿昇任式すうききょうしやうじんしきの印象が反映されているといわれる。

第5楽章 生き生きと 祝祭的で高揚感にあふれたフィナーレ。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1850年／初演：1851年2月6日、デュッセルドルフ／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

10/23
名曲10/25
横浜マチネー

Program Notes

モーツァルト

交響曲 第25番 ト短調 K.183

1773年秋、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は、3回目のウィーン旅行からザルツブルクに戻るとすぐに、新しい交響曲に着手した。帰着からおよそ10日後の10月5日に完成した第25番は、モーツァルトの2曲しかない短調の交響曲のうちのひとつで、いずれもト短調であることから「小ト短調」とも呼ばれている。とりわけ映画『アマデウス』の冒頭場面で衝撃的に用いられた第1楽章は印象的である。その人間の感情を露わにするような音楽は、かつては当時のドイツ文学界で盛んだった精神運動「シュトゥルム・ウント・ドランク（疾風怒濤）」がウィーンの音楽界でも流行し、ハイドンやヴァンハルらが書いた短調交響曲から影響を受けたと指摘されていた。しかし、近年の研究では、ウィーン宮廷でよく演奏された、皇帝ヨーゼフ2世お気に入りの作曲家ガスマンの短調の弦楽四重奏曲からの影響が注目されている。

また、楽器編成も、ホルン4本はこれまでになく、ファゴットを低音楽器から独立させた用法（第2楽章）も画期的である。いずれにせよ17歳のモーツァルトが書いた第25番は、半年後に作曲される第29番イ長調とともに、交響曲作曲家として新たな境地を開くことになった。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ、ト短調 シンコペーションのリズムによる第1主題と軽やかで愛らしい第2主題（変イ長調）が鮮やかな対比を作り出す。

第2楽章 アンダンテ、変ホ長調 ヴァイオリンと2本のファゴットが対話する優雅な主題で始まる。

第3楽章 メヌエット、ト短調 強弱を強調したメヌエット。中間部（トリオ）は、管楽器のみによるト長調の明るい響きで、オーストリア的な雰囲気漂う。

第4楽章 アレグロ、ト短調 ユニゾンで始まる鋭い第1主題、滑らかに進む第2主題が示される。第1楽章で多用されたシンコペーションや32分音符のリズムが現れ、交響曲全体の統一感をもたらしている。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1773年10月5日完成／初演：不明／演奏時間：約24分
楽器編成／オーボエ2、ファゴット2、ホルン4、弦五部

シューマン

チェロ協奏曲 イ短調 作品129

19世紀ロマン派の作曲家ロベルト・シューマン（1810～56）は、チェロ協奏曲を1曲しか残していない。憂愁を帯びた旋律や、楽器の特性を活かした深々とした響きなど彼のロマン主義的な世界観がよく表れた作品であり、ハイドン、ドヴォルザーク、エルガーの協奏曲と並ぶ屈指の名曲である。

1850年9月、友人のフェルディナント・ヒラーから自身の後任としてデュッセルドルフ市の音楽監督への就任の要請を受けたシューマンは、妻クララとともにデュッセルドルフに移住した。新天地で心の安定を得たシューマンは、音楽監督として活動するとともに、作曲家としても心機一転、創作に取り組み、10月にはチェロ協奏曲を完成させた。楽譜は1854年に出版されたが、作曲家の存命中に初演されることはなかった。

初演については諸説あるが、近年の研究で、1860年3月27日の「オルデンブルク新聞」に掲載された演奏会広告から、同年4月23日にオルデンブルク大公宮廷楽団のチェロ奏者エーベルトの独奏により行われたことが判明している。

3つの楽章は切れ目なく続けて演奏される。クララが「オーケストラとチェロの絡み合いに魅了される」と日記に記したように、独奏チェロとオーケストラが一体となって音楽を形づくり、楽章間の音楽的素材も有機的に結びついている。

第1楽章 速すぎず、イ短調 オーケストラの3つの和音による導入に続いて、独奏チェロが穏やかな第1主題、跳躍音程と3連符を主体とする第2主題を示す。

第2楽章 ゆっくりと、ヘ長調 独奏チェロが憧れに満ちた旋律を静かに歌う。第1楽章の3つの和音動機や充実した中間部をはさむ。最後に第1楽章の冒頭を想起させる部分が現れるが、テンポを上げ独奏チェロのパッセージで次につなぐ。

第3楽章 きわめて生き生きと、イ短調～イ長調 3つの和音動機に続き、独奏チェロの躍動的な第1主題がオーケストラとの掛け合いのなかで示され、柔らかな第2主題が現れる。独奏チェロのカデンツァを経て、最後は力強く結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1850年／初演：1860年4月23日、オルデンブルク／演奏時間：約25分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏チェロ

10/23
名曲10/25
横浜マチネー

Program Notes

10/23
名曲

10/25
横浜マチネー

モーツァルト

交響曲 第40番 ト短調 K.550

モーツァルトのもうひとつのト短調の交響曲、第40番は、いわゆる「三大交響曲」のひとつで、1788年の夏に第39番、第41番とともにわずか6週間の間に続けて完成させた。モーツァルトが1784年から丹念に書きとめた『自作品目録』によれば、第40番は7月25日に完成と記されている。なぜこの時期にこれら3曲の交響曲が書かれたのか、特定の演奏会のためなのか、楽譜出版を視野に入れていたのか詳細は不明である。初演についても、かつては生前に一度も演奏されなかったという説が有力だったが、具体的な記録は残されていないものの、生前に演奏された可能性は高い。とりわけ第40番は、モーツァルト自身による書き込み入りの演奏会用パート譜が残されていることや、クラリネット付きの稿とクラリネットなしの稿が存在することなどから、生前に何度か演奏されたと考えられている。

このト短調の交響曲について、後年の批評家たちは「抑えようのない永遠の悲しみ」「悲劇的な苦痛に満たされたもの」などと不安や苛立ち、さらには死と結びつけて評したが、音楽批評家でもあったシューマンは、「ギリシャ風のたゆたうような優美さ」（1835年）と表現してその性格を捉えていたことは興味深い。

第1楽章 モルト・アレグロ、ト短調 有名な「ため息」の音型が連続するひそやかな第1主題、のびのびとした第2主題が示される。

第2楽章 アンダンテ、変ホ長調 穏やかな表情のなかで微妙に揺れ動く緩徐楽章。低音から積み上げられる第1主題には半音階進行が含まれ、前楽章の緊張を残す。のびやかで優美な第2主題はフレーズ後半の繊細な装飾が印象的である。

第3楽章 メヌエット、アレグレット、ト短調 峻厳な主部に対して、トリオ部（ト長調）はひとつの動機が弦楽器から管楽器に模倣しながら移される。

第4楽章 アレグロ・アッサイ、ト短調 強弱の対比を生かした第1主題と愛らしい第2主題が示される。展開部では転調が繰り返され、対位的に展開する。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1788年／初演：不明／演奏時間：約30分

楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦五部